

# 未来を生きる子どもたちのために、 今、変わるべきは大人の常識。

今年、創立75周年・創業100周年を迎える香川証券では「これまでも「子どもたちの豊かな未来」について何ができるかを考えてきました。今回は、代表取締役社長中條博之をフアンリターターとして、これまでの教育に二石を投じるために、さまざまな角度から教育に関わる3人と一緒に、子どもたちの未来と、それを支える大人に何ができるかを考えました。

## スキルは単なるツールではない。

**中條** 2020年度の教育改革では、小学校でプログラミングが必修化、英語が教科化されます。まず新しく変わる教育について、親はどう捉えるべきかをお聞かせください。

**山口** 「何のためのプログラミング・英語教育か」という概念をしっかりと捉えることが不可欠になります。プログラミングや英語は、職業スキルや受験スキルとして覚えるのではなく、人間形成を含めた思考の方法を習得するために学ぶツール。お子さんをいい会社やいい大学に入れるために、手に職を付けさせようとしてはいけません。

**濱川** 小学校ではプログラミングの授業を、論理的思考を身に付けるためのものとして提供されています。ただ論理的思考は、プログラミングでなくても国語の授業でもできるんです。プログラミングや英語は言語であり、ツールの一つ。言語を



ツールと考えられるようになると、思考がクリエイティブになるんです。子どもたちには無限の可能性があるので、それを生かすためのツールであって、手に職を付けるためのツールではないと思っています。

**片桐** 何か課題があっても、その課題解決するための一番コストのからないツールがプログラミングなんです。だからこそ、ただ作るのではなく、なぜプログラミングを学ぶのかという目的意識を持つことが大切です。またプログラミングにも、さまざまなジャンルがあり、そこから自分の好きなものを見つけてみることもできます。例えば最初はゲームを作ろうと思っていたけれど、途中で「僕は背景を描くのがすごく好きだ」と気付くというようにね。

**濱川** 偏差値教育が正解だった昔と違い、今はこれという正解がない時代です。今後のキーワードは「ボーダーレス」。言語を英語にするだけで、世界中のどこからでも、何でも学べるようになり、国や学科という枠を超えられ、また、テクノロジーを使えば障がい者と健常者のボーダーを超えることも可能になる。ボーダーレス社会においては英語やプログラミングは必須ツールになるんです。

**山口** 正解が一つではないから、まず未来のゴールを想定し、そこから今できること、やるべきことを設定することが必要なんです。プログラミングは、絵を描く作業と似ているといわれています。最初は模倣でもそのうちスキルが身に付いて、そのスキルを生かして創造していくうちに「気付き」が生まれる。この「気付き」が他との違いです。僕はそれを「飛躍的な類推力」と勝手に名付けたんですが、飛躍的な類推力がないとイノベーションは起こりません。まずは、そこに至るまでを論理的に構築するためのスキルを身に付けておくことが重要です。

**濱川** 英語では多くの場合、最初に言いたいことを伝えるトップダウン式で会話をします。一方、日本語は結論に向かって話が緩やかに広がっていく形。なので、論理的思考を身に付けておかないとグローバルな社会で通用しないんです。

**片桐** 論理的思考能力というのは、自分の考えを相手に伝えるための便利なツールだと思っています。日本語は発想するには便利な言葉ではあるんですが、一つの意味に対して表現がたくさんあります。一方、英語は単語の数が少ないので、日本語を常用している我々が英語で何かを語ろうとすると、頭の中を論理的に整理する必要があるので、重要なカギは「IT・英語・金融」。

**中條** 論理的思考能力を養うといつても具体的にどう分らないと、とりあえずプログラミングに行かせる、英語に行かせる、という家庭も出てくるのではないのでしょうか。その結果、子どもも何がしたいか分からない状況になる。そう考えると怖いですが、このあたりについてはどうお考えでしょうか？

**濱川** 習い事を保険だと思わないことが重要だと思います。今後、論理的思考を身に付けるためにIT・英語・金融、この3つは重要になると考えています。ITは、知識があっても組み合わせれば業務効率化が可能です。英語は、活躍の場を世界に広げられる。例えば、タスキを日本語で検索すると10000万件、英語で検索すると7200万件なんです。つまりそれだけ世界は広い、金融についてのスキルは、自分が経営者であつても会社に雇用されていても必要なスキル。社員だからといって会社のお金の流れも分からないような受け身の人材は、企業に必要とされなくなると可能性がありま



次の時代を生きる子どもたちのために。

**中條** これからの時代、親が子どもにできることは、いったいどんなことでしょうか。

**片桐** 親ができるのは、子どもたちの可能性をつぶさないことだけだと思います。自分たちもどんなことができるかが分からない時代において、大人ができるのはそれしかない。教育の地域間格差も同じで、地方にいるから可能性がなくなるのは良くない。つぶさない。チャレンジを許す。機会を平等に与える。これを全ての子どもたちに対してできることが理想です。

**山口** 大人には時代の変革の中にあるという意識をまず持つてほしいと思います。年表でいえば明治維新や産業革命にあたる大きな節目。だけど、実際そのことに気がついていない方がほとんどなわけなんです。時代の変革が起きるとそれまでの経験や指標がまず役に立たなくなります。常識が変わるので、だから、何を教えてあげば安心というのではなく、すべてに触れることのできる環境を整えてあげないといけないんです。

**片桐** そうはいっても英語を大学入試のツールとして考えている大人がまだまだ多いです。資格は取れますか？と質問される方は多い。その先には大学受験があり、いわゆるいい企業への就職という道筋があるんですが、その常識はもう通用しなくなる。

**濱川** 大人に必要なのは分析力なんです。その子自身が持っている適性や能力を見抜いてあげる。それぐらいしか大人の仕事で究極はない。ただ、それって縦の関係である親には難しいんです。僕も自分の子どもはほとんど見られませんが、昔はそういう「ナナム」の関係は築いてくれるような先生が、学校に1人くらい減っています。だから学校以外で「ナナム」の関係は築けるところを持つこと

**中條** 新しい時代を生きる子どもたちには、IT・英語・金融というツールを身に付けるためにできるだけ多くの選択肢を提供することが必要だということがよく分かりました。大人が、今までの「常識」に凝り固まることなく、見守る勇氣を持つことがポイントですね。今日



NESTON Kids After School  
共同代表  
**片桐憲作氏**  
外資系企業やIT企業に携わるなかで教育の地域間格差を感じ、同スクールの開校にあわせて東京からUターン。英語を学ぶのではなく、英語で学ぶことをコンセプトにした、まったく新しいイングリッシュアフタースクールやプログラミングスクールの責任者に。未来を見据えたアクティブラーニングスタイルの学びを提供している。



濱川学院  
代表  
**濱川武明氏**  
予備校講師として教壇に立ち1500名以上の生徒の指導にあたる。しかし教育改革を目前に控えてもなお「受験産業」が本質的に変わらない現状を憂い、本質的な学びを得られる濱川学院を設立。これからの時代を創る世代に、受験産業ではなく「教育」として携っていくことを理念としている。



エストニア投資信託  
前日本支局長  
**山口功作氏**  
IT先進国であるエストニアの駐日大使館で15年に渡り勤務。昨年その職を離れ、出身である東京から高松に移住。東京では社外取締役・顧問等として複数の企業に従事し、デジタル社会と教育改革の啓蒙活動をライフワークとしている。

